

## 「ルカノール伯爵」

(3)

—パトロローニオの書—

ドン・ファン・マヌエル

木原 太源 訳

## 第二十四話「三人の王子を試みんとした王に

起った事について」

ある時ルカノール伯爵が助言者パトロローニオと話をしておられた際、次のようなことを語られた。

「パトロローニオ、予の邸内では大勢の若者が修業に励んでおる。高貴なる出の者もあれば身分の低い騎士の子弟もあり、彼らの気質たるや驚くほど千差万別であるのを知る。そこで予はお前の叡智を頼み、何れの若者が将来ひとかどの人物となるのか予知し得る方法を助言してもらいたい」

「伯爵様」とパトロローニオは返答した。「私目へのお訊ねはまことに確答のし難い御質問でございます。人には行末の事な

ど何一つ予知することは出来ぬからでございます。殿のお訊ねは正にこの行末についてでございますので、人知の及ばぬことでございます。しかしながら若者達の外見や内面から窺われまじ様々な有様ありさまから察することは可能でございます。つまり容貌、挙措、肌の色つや、胴体及び四肢の形状といったこれら外見上の有様からは、心臓・脳・肝臓といった最も大切な器官の状態を推し測れます。たしかに外見上の有様は内面の状態をありていに伝えはしますが、それを精確に知ることは出来ませぬ。外見上の有様が内面の全ての状態と合致することは稀で、いくつかの有様は一つの状態を、他のいくつかは別の状態を伝えるだけだからでございます。しかしながらおおよその点では一致致しております。内面の様子は顔に最も的確に現われます。とりわけ目には如実で、また挙措にもよく現われます。ところで、容貌の美醜によって優美さが云々されるものではないことをご承知置き下さい。着飾った美しい男性でもりりしさに欠ける者が大勢おりますし、見目は悪くとも優雅でさつそうとした男性もいるのでございます。胴体や四肢の形状は体格を表わしておりますから、われわれはそこから剛なる者か敏なる者かを見定めようと致しますが、外見からではなかなか判るものではございません。申し上げておきますが、これらは目安であって様子を伝えるだけでございますから、正確なものではございません。たゞこうであろうとの見込を示しているだけでございます。これらはあくまでも外見上から窺える有様でございます

すから、殿のお訊ねのことも、このようなことから明確に判断し得ないのでございます。そこで外見に較べますと多少はましな内面の様子から、若者達の気質をお判りいただきませうは、ある時回教徒の王が後継者を選ぶべく三人の王子を試された話をお聴きいただけます」

伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようにとお頼みになられた。

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「ある回教徒の王には三人の世継ぎがおありでございました。回教では、父親の目がねに適う息子に家督を継がせることが出来るのでございます。そこで王がかなりのお年になられた時、国内の主だった方々が「三人の王子様の中で王位をお譲りになるお考えのお方はどなたかお教えいただきとうございます」と王に願ひ出ました。すると「ひと月後には知らせよう」と王はお応えになられたのでございます。

その日から十日ほど過ぎたある日の午後、王は一番年上の王子に「明朝早くに馬で遠出をしたい。一緒に参れ」とお言いつけになりました。ところが翌日、王子が父王の部屋へお出になりました時は、王のお命じになられた早朝ではございませんでした。王子がお見えになると王は「着替えをしたい。衣服を持って参るように申し付けよ」とお言いつけになりました。そこで王子は王の侍従にそのことをお命じになりますと、侍従は「ご所望のお召物は何んでございましょうか」と訊ねたのでご

ざいます。そこで王子は王の居室へ戻って訊ねられました。すると王は「外衣だ」と仰せになりましたので、王子は侍従にその旨を伝えられますと、「何れの外衣をお召しになれるのぞございませう」と訊ねたのでございます。そこで王子は再び王の居室へ戻られました。このようなことが一つ一つのお召物に持ち上がりましたから、お召替えの衣服がすっかり取り揃えられる迄に、王子は王と侍従の間を幾度も往き来されたのでございます。それからやと侍従が参上し、王が衣服や履物をお召しになるお手伝いしたのでございます。

王は身仕度をすっかり整えられますと「馬を引いて来させよ」と王子にお言いつけになりました。そこで王子は王の馬丁頭に「馬を引いて参れ」とお命じになりました。すると「何れの馬を引いて参りましょう」と馬丁頭は訊ねたのでございます。そこで王子は王の所へお訊ねに戻られました。このようなことが鞆、馬銜、拍車、太刀にも持ち上がったのでございます。つまり騎馬の際に必要な全ての物一つ一つにでございます。

ところがすっかり仕度が整いましたのに王は王子に「予は出かけることが出来ぬ。代ってお前が市中に出、目に入ることはつぶさによく見て参り、予に報告せよ」とお言いつけになりました。

王子は宮廷の重臣達を供揃に、多数のラッパや太鼓その他いろいろな楽器の奏者を伴い、騎馬で巡察に出かけられました。しばらく市中をご視察なさるとご帰城になりました。早速王は

「お前の目にはどのように映ったのか」とお訊ねになりました。王子は「万事申し分がございませんでした。ただ楽の音の騒がしいのには参りました」と返答されたのでございます。

それから数日後、王は二番目の王子に「明朝予の所へ参れ」とお言いつけになりました。王子が御命令通りに参上なさいますと、王は兄に当る先の王子をお試しになられたのと同じことをこの王子にもなさいました。すると「市中は申し分ございせんでした」とこの王子も兄上と同じ報告をされたのでございます。

さて、それからさらに数日後、王は末の王子に「明朝早くに出かけるので随伴せよ」とお命じになりました。王子は王より前に起きられると、王がお目覚めになる迄お待ちになりました。そして王のご起床と同時に寢所へお入りになり、畏敬の念を込めてうやうやしく挨拶されたのでございます。王がお召替えの衣服を持って来させるようお言いつけになりますと、王子は「何れのお召物がよろしゅうございましょうか」と、王のお召しになられる衣服や履物を逐一お尋ねになられ、一度で総ての物を取り揃えられました。その上侍従の手を借りずに御自身で王にそれらを付けられたのでございます。このようにして王子は、お世話することはこの上もない喜びであり、子である自分が行なうのは当然である意を、身を以って王に伝えられたのでございます。

身仕度がすっかり整いますと、王は馬を引いて来させるよう

お言いつけになりました。そこで王子は「お氣に召す馬は何れでございましょうか」とお訊ねになり、同時に鞍や馬銜や太刀、その他騎馬の際に必要な様々な馬具を初め、供揃の者の人選までもお諮りになられ、手抜かりは何ひとつございせんでした。つまり一度のお訊ねで一切の物を手配されたのでございます。王がお言いつけになられた物は総て手落なく取り揃えられ、整えられました。

何もかもがすっかり整いました時、王は「予は氣が進まぬ。お前が行って目にしたことを報告せよ」とお言いつけになりました。そこで王子は二人の兄上と同じように、大勢の供の者を引き連れて出かけられました。しかしながら三人の御兄弟は元より誰れひとりとして、このようなことをなさる王のご真意を知る由もなかったのでございます。

王子は城を後にされるや供の者に、市中を隅無く、加えて王の宝物庫をも見せるようお命じになりました。さらに、市中随一の観るべき物や回教寺院の数、その上御城下に住む民の人数も訊ねられたのでございます。市中の巡察を終えられるとさらに足を市外へ運ばれました。そこで歩兵と騎兵の全將兵に召集をかけられると、模擬戦や武芸試合を行うようお命じになったのでございます。さらにご観戦後、御城下を取り囲む城壁、望楼、櫓までもご覧になり、総ての視察を終えられると直ちに城へ向われたのでございます。

王子のご帰城はそれは大変遅くになってからでございまし

た。王は早速王子が見てこられたことをお訊ねになりました。すると王子は「おいやでなければ、見た通りのことを申し上げます」と返答されたのでございます。王は「苦しくない申してみよ」と仰せになりましたので、そこで王子は「私は常々父上を真の王であるとおもっております。しかしながら父上は王たるにふさわしい義務をお果しになってはおられぬものとお見受け致しました。大勢の立派な将兵に大層な御勢威、その上富も申し分のないほどお持になっておられますのに、全世界をいまだ手の中になさっておられないのは合点がゆきませぬ」とお応えになりました。王はこの卒直な意見に大層ご満足の様子でございました。

「そうこう致します内に後継者を宣する時が参りましたので、王は末子の王子を世継にすることを勅諭されたのでございます。」

この御決定は三人の王子の言動のご觀察からなされたものでございます。王は二人の兄の王子の中から後継者をとお考えのご様子でしたが、御賢察の結果適任とはご判断されず、末弟の王子を指名されたのでございます。

伯爵様、何れの若者が将来最も有為な人物となるかをお知りになりたければ、只今申し上げましたことをよくお心にお留め下さい。さすればそこから何かが判りただけでしょうし、また若者自身が伝えることから手掛りを得られるでありますから」

伯爵はパトローニオの話にとても満足された。

ドン・ファンはこの教訓談を有益であると考えたのでこれを本書に記させた。そして次のような詩を作った。

若者が将来どのような人間になるかは、  
その言動から察知することは出来る。

この物語はこれで終るが話はさらに続く……

第二十五話「サラディンの助言により獄舎から解放されたプロバンス伯に起った事について」

ルカノール伯爵がある時助言者パトローニオとこのような話をしておられた。

「パトローニオ、先日予の臣下が「縁者を嫁がせたいと考えております。私はこれ迄殿のご相談には最善を尽してお応え致して参りました。この度はこの件に關しまして是非とも殿のお知恵を拝借致したくお願い致す次第でございます」と頼みに参った。そして持ち込まれている総ての縁談を語ってくれた。予は臣下がうまく取り計らうことを願うので、このような事に豊

かな知識を有すお前を頼み、有益な助言を与えられるよう、この件に関するお前の考えを聴かせてもらいたい」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは返答した。「縁者を嫁がせたいと願っておいでのご家来の方にふさわしい助言をなさいますには、バビロニアのスルタンであるサラディンとプロバンス伯とに起きました事をお聴きいただきますれば幸でございます」

ルカノール伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようにとお頼みになられた。

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「ある伯爵がプロバンスにお出になりました。立派なお方でございますから、常々魂の救済と永遠の生命を得るために偉業の達成を熱望しておられました。事実御名と国威を高める偉業を実行に移されたのでございます。そのために大勢の兵をお集めになり、十二分の装備を施されますと聖地へ赴かれたのでございます。伯は、何事が起きようともそれは神の務に身を捧げた上での事であるのだから、自らを果報者と見做し得るだろう」と考えました。神の試練は到底測り知れるものではございません。すなわち主はたびたび主の下僕を試そうとなさるからでございます。しかし、その者が神の試練によく耐える者であれば、主は神の試練を常にその者の名譽や利益りやくとなるよう取り計られるのでございます。そこでわれらが主はプロバンス伯をお試しになるお考えから、スルタンの手に捕えさせられたのでございま

す。

伯は囚人の身ではありませんでしたが、伯のすばらしい知徳を知るサラディンは伯を礼遇し丁重にもてなしております。その上重要な事柄の処理に当っては伯の助言に従って行なっております。一方伯も適切な助言を与えておられましたので、スルタンは全幅の信頼を伯に寄せておったのでございます。このように囚人の身ではありながらも伯は、御国におられるかの如く、サラディンが統める異国で異教徒の君主と同じ権勢をお持ちになつておられたのでございます。

伯がプロバンスの御国を立たれます時、ひとりの女兒をお残しになりました。以後長い年月の間伯は囚人の身であられたわけでございますから、女兒もすでにお年頃になつておられました。でございますから、伯の奥方であられる伯爵夫人や縁者の方々は、諸国の皇子や公達からの縁談が殺到している旨を認め、た書状を伯に送られたのでございます。

ある日サラディンが相談にお出になり、それに助言なさいました後で、伯は君主に次のように話し掛けられたのでございます。

「陛下、私は陛下のご厚意と礼遇に預っておりますばかりか、ご信頼をも賜っております。故に、陛下のお役に立つことのでこのご恩に報いることが出来ませばこの上もない幸と存ずる次第でございます。陛下には諸問題の解決に当たられます度に、私の愚見をお求めいただいておりますが、此の度は陛下の

「ご好意と英知にお頼り致しまして、私の案じております事にご所見を賜りますよう心からお願ひ申し上げる次第でございます」

サラデインは伯の申し出を嬉しくおもわれ「予は喜んで所見を述べよう。また必要とあらば援助も厭わぬ」と仰せになられたのでございます。そこで伯は御息女との縁組を申し出ております求婚者のことをお話しになると、婿の人選についてサラデインの見解を求められました。サラデインは次のように応えました。

「伯よ、其方は思慮に富む後仁であるから、わずかな言葉で予の真意を十分汲み取ってくれよう。それではこの件に関する予の考えを述べることに致す。予は其方の娘御の求婚者とは全く面識がない。ましてやその一族のことや彼らの能力及び氣質、さらには其方の領地との位置関係、彼らの長所や短所といったことは予の関知するところではない。故に的確な所見を述べることは叶わぬが、ともあれ予の見解はこうだ。娘御をひとりの男子に嫁がせることだ」

伯はサラデインに心から感謝されました。サラデインの言わんとしたことを十分お悟りになられたからでございます。早速伯爵夫人と縁者の方々への文にサラデインの助言を認められると、さらに、富や権勢を基準に婿選びをするのではないから、國中の騎士を初め縁談を申し出ている諸国の皇子や公達の習性、氣質、身体の様子を知らせるようお頼みになられました。

伯爵夫人を初め縁者の方々はこの書状にはびっくりなさいましたが、伯のお求め通り國中の騎士と求婚者達の習性や氣質の良し悪し、その他いろいろな様子を詳述なさったのでございます。

伯は返書を手にはされるとサラデインにお見せになりました。目を通されたサラデインは、總体的には皆申し分のないこと、しかし諸国の皇子や公達のそれぞれには、暴飲、暴食、短気、人嫌、尊大、非行、吃、その他何らかの欠点があるのを見出しました。と同時に彼は、ある小貴族の子弟が、返書に記された報告から判断すると、これ迄一度も耳にしたことのないほど申し分のない立派な騎士であることを知ったのでございます。その結果サラデインは、伯の息女をこの騎士と添わせるように助言致しました。そして「他はこの者より身分の高い家柄の出ではあるが、おのおの何らかの欠点を持っておるので、この者と添わせるのが一番よい。富や家柄でよりも、品行で判断できる人物であるからだ」と付言したのでございます。

伯は伯爵夫人と縁者の方々に、サラデインが薦めた小貴族の子弟と妻あわせるようにと認めた書状を送られました。一同はとても驚きましたが、使いを立て、この若者を招くと、伯の言葉を伝えたのでございます。すると「伯の富や名声や高貴さに較ぶれば私などはその足下にも及ばぬことは申す迄もございません。しかしながら、仮に私が伯と同じ権勢を有していると致しましょう。その場合御息女が私と添われれば、必ずや良き伴

伯を得たとお考えになるではありません。もし皆様方が戯れでこのようなことを申されているのであれば、私を不当に扱い、理由も無く私を辱めるおつもりなのだと考えます」と一同に応えました。そこで全員は自分達がまじめに考えていることや、諸国の皇子や公達に娘を嫁がせるより彼に与えよとサラディンが伯へ助言した理由と、とりわけ彼が見上げた人物であることからサラディンに選ばれた理由などを説明しました。

この説明により、彼はこの縁談が真実であることを納得しました。そしてサラディンが最適の人物として自分を選んでくれたことはとても名誉なことなのだから、彼の意に添わねば男子ではないと考えました。そこで早速伯爵夫人と縁者の方々に「この話が真実であることを私に承知させたくば今すぐ伯爵領と年貢の支配権をお引き渡しいただきたい」と迫りました。しかしながら実行しようとしている計画は口外致しませんでした。一同はこの要求を喜んで受諾すると何もかも彼の手に委ねました。莫大な金子を手にするや、彼は極秘裡に多数のガラーラ船を武装し、自らのために大金をしまひ込みました。準備が整いますと婚儀の日取を定めました。

婚儀は厳粛な内にも豪華に行われました。その夜新妻の待つ闇へ行くと夫婦の契りを結ぶ前に、新夫は義母である伯爵夫人と縁者の方々を呼び「皆様方がすでにご存じの通り、余多の立派な方々の中から伯が私をお選びになりましたのは、サラディンの娘御をひとりの男子と妻あわせよ」との助言によるもの

であります。サラディンと伯は私に大変な名誉をお与え下さり、婚にふさわしい者として私をお選びいただきました。故にお二人の恩に報わねば男子ではないと考えております。そこで私の妻である姫と伯爵領を皆様方の手にお任せし、出立することに致します。私が真の男子であることを広く知らしめるべく、立派に義務を果せるよう神がお導き下さることを願っております」と打ち明けたのでございます。言い終えるとすぐに馬に乗って壮途につきました。そして、先ずはアルメニア王国を目指したのでございます。そこで土地の言葉と習慣をすっかり修める迄過ごしました。ところがその間に、サラディンがすぐれた狩人であることを知ったのでございます。そこで多数の優秀な鷹と猟犬を入手するとサラディンの国へ船出しました。兵士に「私の命令がある迄決して下船するな」と命じ、港毎にガラーラ船を一隻ずつ配したのでございます。

さてサラディンの宮殿へ着くと彼は大歓迎を受けました。ところが彼は君主に対する礼儀作法である御手への口吻や表敬の挨拶を行なわなかったのでございます。サラディンは彼の必要とする物は全て供与するよう臣下にお命じになりました。彼はサラディンの厚意には心から感謝しましたが、何ひとつ受け取ろうとはしなかったのでございます。そして「援助を求めにやうて参ったものではございません。陛下の御名に引かれて参ったのでございます。もしお許しを願えますならば、陛下や将兵の方々がお待ちの手本にすべき素晴らしいものを学ばせていただ

くために、しばらく私を宮殿に滞在させていただけますれば幸  
 でございます。陛下は狩には殊の外ご執心と承っております。  
 そこで優秀な鷹と猟犬を多数持参致して参りました。お望みの  
 ものがございませぬれば何なりとお選びいただきますように。残  
 りは陛下の狩のお伴に私が連れて参ります。どのようなことに  
 でも私をお役立ていたゞきますれば光榮に存じます」と述べた  
 のでございます。サラデインはこの言葉に心から感謝され、献  
 上された鷹と猟犬の中から、これはとおもう物をお受け取りに  
 になりました。しかしながら、サラデインは彼に返礼の品を受け  
 取らせることも、彼の来歴を聴くことも、君臣のきつなを結ば  
 せることも出来なかつたのでございます。かくして彼は長い間  
 宮殿で過ごすことになりました。

われらが主なる神はお望み通りに物事をお導きなさいますの  
 で、彼が狩の伴をしておりました時、鷹に鶴を追わせられたの  
 でございます。鷹は伯の娘婿が差し向けておきましたガレーラ  
 船が碇泊する港の上空で鶴に追いつきました。美事な馬に跨る  
 サラデインとその伴は供の者より遙かに先んじておりましたか  
 ら、彼らは二人の姿を見失ってしまったのでございます。サラ  
 デインは鷹と鶴が採み合っている所へ来ると、鷹に手を貸すべ  
 くすぐさま下馬されました。これを見たサラデインの伴の伯の  
 娘婿は、船にいる兵士を呼び寄せたのでございます。鷹をけし  
 かけるのに夢中であつたサラデインは、気がつくやガレーラ船  
 の兵士にすっかり取り囲まれてるのを知って驚きました。伯

の娘婿は太刀を抜き、逃走すれば切り殺すつもりであることを  
 悟らせました。彼を目にするやサラデインは「裏切り者め」と  
 声高になじり始めたのでございます。伯の娘婿は「神は私が裏  
 切り者であるとはお認めにはなりませんまい。ご承知置きいただ  
 きたいことは、私は一度も陛下をご主君と考えたことはござい  
 ません。ですから陛下の下賜の品は元より、臣従の義務を負う  
 物など何ひとつとしてお受けしなかつたのでございます。これ  
 は理由があつての行動でございますからお嘆きなさいませぬよ  
 うに」と応えました。こう言い終えるとサラデインを捕え、ガ  
 レーラ船へ引立てました。船内へ入れると「私が大勢の立派な  
 方々の中から陛下のお目がねに適って選ばれました伯の娘婿で  
 ございます。理由があつて私をお選びになられたのでございま  
 すから、私がこのような行動を取らなければそれにお応え出来  
 なかつたであります。どうか岳父をお引き渡しいただきと  
 うございます。さすれば岳父は、陛下がお与えになられました  
 助言が真に申し分のないものであつたことを悟るでありますよ  
 うから」と告げたのでございます。

サラデインはこの言葉を耳にすると、心から神に感謝を申さ  
 れ、自分の助言が間違つていなくなつたことにご満悦でございま  
 した。これは権勢がいや増すことよりも喜ばしいことであつた  
 からでございます。そこで伯の娘婿に「喜んで岳父殿を釈放し  
 よう」と約束したのでございます。伯の娘婿はこの言葉を信じ、  
 直ちにサラデインをガレーラ船から解放すると、彼と連れ

立って陸へ上がりました。そしてガレーラ船の兵士達には『港へ来る者の目に触れぬよう湾外へ出よ』と命じました。それから二人は盛んに鷹をけしかけました。そこへサラディンの兵士達が追いつきました。その時彼らが目にしたものはいかにも嬉しそうなご主君の様子でした。もちろんサラディンはつい先ほどの出来事は口には致しませんでした。

一同が宮殿へ戻ると、サラディンは囚人の身の伯が住まう邸へ伯の娘婿を連れて行きました。そして伯を目にするや満足そうに語り出したのでございます。『伯よ、今、予は心から神に感謝しておる。其方の娘御の縁談のことでの確な助言をなし得たからだ。ここに居るのは其方の娘婿だ。其方を自由の身にしてくれる者だ』そこでサラディンは伯に彼の娘婿が行なった事を、すなわち岳父を奪還するために彼が見せた勇氣と分別、また自分の口約を信じた見事さなどを語って聴かせました。サラディンは元より伯やその場に居合わせた者は皆、伯の娘婿のこれ迄の努力を絶賛致しました。同時にサラディンと伯の友情を賞賛し、万事を申し分のないみごとな大団円へとお導きになられた神を礼賛したのでございます。サラディンは伯と彼の娘婿に多数のすばらしい贈物を与えました。さらに伯には、囚人であるが故に被った心労の償いとして、囚の身の期間中に伯爵領から上がった年貢金の二倍をお与えになりました。その上で伯を国へ旅立たせられたのでございます。

ところでこの仕合わせは、娘御をひとりの男子と妻あわせ

よ』とサラディンが伯に与えた助言の賜物でございました。

さて、ルカノール伯爵様、御家来の縁者の息女の縁談の事で、殿はご所見をお述べになるとのことでございますので、このように助言なさって下さい。『肝要なことは、添わせる相手が出来た男子であるかをよく吟味すること。もしふさわしくなければ、その者が如何に出自が高く、身代が豊かであろうと、そのような縁組は幸福とはならないであろう』と。立派な者は名を挙げ、家門を高め、身代を大きく致しますが、そうでない者は、如何に身分が高く、豊かな身代を有しておりますも、瞬く間に失ってしまうものであることをご承知ただかねばなりません。このような例は枚挙に遑がございませぬほどで、例えば、父祖伝来の家名や身代を継承した者がそれに備する人物でなければ、身代は傾き、家名は汚れるのでございます。反対に、由緒ある家柄の者或はそうでない者でありましたが、精進すれば身代や家名を先祖が築き上げた以上に大きく、また高くすることがございます。故に人の身に生じる利害の全ては、身分がどうであれ、各人の資質に由来するものであることを心得ておく必要がございます。ですから縁組を行う際に先ず第一に留意しなければならぬことは、縁を交す当人達の習性、知性、教養、品行の点であります。その次には身分、身代、容姿、両家の間柄といったもので、これらが申し分なければその縁組は一層良縁となります。しかしながら後者を重んじる余りに前者を軽んじることは、絶対にはならぬ

いことでございます」

伯爵はパトロニーオが語った理にとても満足され、彼の話に心から得心されました。

ドン・ファンはこの教訓談が有益であると考えたので、これを本書に記させた。そして次のような詩を作った。

真の男子は名を挙げ、身代を富ますが、

そうでない者は家名を汚し、身代を傾ける。

この物語はこれで終るが話はさらに続く……

## 第二十六話 「嘘の木に起った事について」

ある時ルカノール伯爵がパトロニーオと話をしておられたが、次のようなことを語られた。

「パトロニーオ、予は元より交際者つきあひに一度も真実を申ししたことのない嘘吐きで人騒がせな輩の予をながしるにする振舞が目に余り、予の堪忍袋の緒は切れんばかりの状態にあることを承知して置いてくれ。連中の空言からごとは常に実まことしやかであることから、輩にはとても有利に働き予には甚大な被害をもたらすばかりで、ために連中の勢力拡大と、予と反目する者の心を引き寄せるのに大いに役立つおる。予もその気になれば輩のよう

にたくみに空言からごとも吐けようが、余りにも不正なやり方故にそのような手段は用いたくない。そこでお前の叡智を頼み、このような連中に対処すべき手だてを助言してもらいたいのだ」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは返答した。「この件に關しまして最良にして最適の策を講じられますには、真まことと嘘の間に持ち上がりました事をお聴きいただきませすれば幸いです」

伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようにとお頼みになられた。

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「嘘と真はある時共同で事に当ることを取り決めました。しばらくするとせつかちな嘘が『木を植えようではないか。暑い時には緑陰を楽しめるし、木の実を味わうことも出来るから』と真に提案致しました。真は手軽で楽しい企画なので喜んで応じました。

木が植えられ、やがて芽が出始めると、嘘は真に『木を二つに分けてどちらかを自分の物にしようではないか』と持ち掛けました。それは真にはとてもよい考えのように思えました。そこで嘘は『根は木の生命の源だからこれほど役に立つすばらしい物はない』と真に地中の根を選ぶように勧めると、『俺はまだまだ伸びる一方の枝をもらおうとするか。地上に出ているので、人間が手折ったり、もぎとったりするだろう。その上動物にはかじられ、鳥には嘴や脚で痛めつけられ、陽には焼かれて

干上がり、厳しい寒さに凍えることだろう。それにしても根はこのような危ない目に全く会わなくて済むのだから』と嘘はさも自分がひどい目に会うかのように、いろいろ詭弁を弄したのでございます。このように言われてみると、素直で、信じやすく、邪意のない真は、仲間の嘘の言っていることは真実であると思ひ込み、一番良い所を取るように勧められているのだと判断すると、喜んで根を自分の物にすることにしました。嘘は実しやかな空言でまんまと仲間を丸め込んだ己の手並に大満悦でございました。

真は自分の取り分である根の在る地中に潜り、そこで暮らすことにしました。嘘の方は人間と一緒に地上に残ることになりました。阿諛することの巧みな嘘は、瞬く間に人の心に取り入ると、人々を囚にしてみましたのでございます。木が成育し、枝葉が大きく茂り出しますと、木蔭は広まり、目に快よい色どり鮮やかな花々が咲き始めました。人々はこの美事な木を目にするとその周囲に集い、涼しい木蔭と色どり鮮やかな花々を心ゆくまで満喫したのでございます。ところが大方の人はあまりの居心地のよさにそこを離れようとはせず、おまけに他所に居る者までもが楽しく憩いたければ嘘が持っている木の蔭へ行くことだ、と互いに言い交しました。木の下に人々が集まると、阿諛することのたくみで物識な嘘は人々を大いに楽しませ、識っていることをどんどん教えました。人々は嘘からそのわざを学ぶことがとても気に入ったのでございます。嘘はこんな風に

して大勢の人を引きつけました。つまり凡人には単純な空言を、利口者にはくふうをこらしたものを、そして知者には実しやかなものを教えるといった具合でございました。

殿にはその手口をご承知置きただかねばなりませんので、具体的に申し上げることに致します。単純な空言とは、やる気が毛頭ございませんのに、何某殿、そのような事は私が貴殿に代ってやりましょう」と吐くようなものを言います。くふうをこらした空言になりますと、宣誓をした上で保証金や契約権をも与えて相手を安心させておきながら、約束を果さなくて済む手だてを考えると、類のものです。ところが実しやかなものになりますと、その効き目は絶大で、生命にかかわるほどでございます。と申しますのは、真実の衣を纏っているからでございます。

嘘はこのような手口をたくさん知っておりました。その上、木蔭の下に集まって来る人々にそれらをとでも上手に教えられたから、人々はそのわざをすっかり自分の物にしてしまい、欲しい物なら大低手に入れることが出来るようになりました。ところがこのわざを知らない人がいなくなりましたので、使えなくなつたのでございます。と申しますのは、人々は木の美しさで嘘から教わつたすばらしいわざに魅せられ、もっと木の下に留まって教わりたいと考えたからでございます。嘘は人々から大いに尊重され、大切にされました。人々はこぞって嘘に付き従いました。ですから、嘘と交際しなければそのわざも知ら

ない人は軽んじられ、また自らを駄目な奴だと見做すようになっていたのでございます。

今や嘘は大変な人気者でした。地中では真がひとり悲憤慷慨しておりましたが、何人も彼の存在などに気が付きませんし、またわざわざ彼を捜しに行く気になる者もいなかったのです。真は嘘に勧められて選んだ木の根以外には自分の身を養うべき食物のないことを知ると、それをかじって食べ出しました。木は美事な枝をたくさん伸ばし、葉をいっぱい茂らせておりましたので、大きな木蔭を宿し、色どり鮮やかな花を沢山咲かせておりました。ところが実を結ぶ前に真がすっかり根を平らげてしまったのでございます。地中の根が食べ尽されておりましたのに、嘘は彼のわざを習得中の人々と一緒に木蔭の下に宿っていたのでございます。その時風が起り、激しく木に吹きつけました。木の根はすっかり失くなっていましたから、嘘と彼の弟子である人々の頭上にいと簡単に倒れ落ちました。嘘はあちこち骨折するという大怪我をしました。彼の弟子である人間の方は落命したり、重傷を負ったりで大変な災難に会ったのでございます。その時幹のあった所に開いた穴から、地中に身を潜めていた真が姿を現わしました。地上に出て来た真は次のような光景を目にしたのでございます。それは、嘘と彼を取り巻いていた人々がひどい目に遭った有様や、人々が嘘のわざを習得し、実際にそれを使用したことを後悔している様子でした。

ルカノール伯爵様、どうかご留意なされて下さい。嘘は美しい大きな枝を何本も持ち、その枝々には花々が溢れております。花とは嘘の言葉であり、思わくや媚を表わしております。それはとても快いものなので、人々は魅惑されますが、木蔭のように実体があるわけではございません。従って決して実を結ぶことはございません。さようでございますから、殿の敵方が盛んに嘘言や欺瞞の手を用いられますも、殿は御身を堅持なさるとともに堅忍不拔を心掛けられ、空言を用いて榮える者を羨望されないことでございます。そのようなことがいつまでも続くものではございませんので、彼らの最期はきっと悲惨なものとなりましょう。順調に行っているとおもっておりますも、嘘の木がその木蔭で存分に楽しんでおりました人々の頭上に倒れて参りましたように、これと同じ事が起きるからでございます。従って、真が軽んじられておりますも、殿はそれを堅く胸に納められ、大切にされることでございます。真を尽されてこそ幸福な日々を送ることが出来るのでございますし、安らかな最期を迎えられるというものでございます。また、この世での繁栄と名譽は元より、あの世での永遠の生命をお授け下さいませ。神の恩寵を得られることは間違いないでございます。」

伯爵はパトロニーオの助言にとて満足されたのでその通りに実行された。すると結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談がとても有益であると判断したので、本書に記させた。そして次のような詩を作った。

嘘を避けて真実に従え、  
嘘吐の最期は惨めなものであるから。

この物語はこれで終るが話はさらに続く……

## 第二十七話「ある皇帝とドン・アルバール・

ファーニェス・ミナヤ及びその

二人の妻に起った事について」

ルカノール伯爵が助言者パトロニーオと話をされていた時このようなことを語られた。

「パトロニーオ、予には妻帯しておる二人の兄弟がある。ところが双方の夫婦関係の有様はまるで正反対なのだ。一人は妻をこよなく愛しており、それは一日たりとも彼を妻から引き離せぬほどだ。その上妻の望むことしかやらす、何事も妻と相談するという有様だ。もう一人は、われらがいくら努めても妻に会おうとはせず、妻の家に入ろうともしない。予はこの現状を心から憂慮しておるので、お前には何とか打開し得る手だてを助言してもらいたい」

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは返答した。「おもいままするに、殿の御兄弟はお二方共間違いをなさっておられます。つまり、奥方を溺愛なさることや、疎遠になさることは間違いなのでございます。しかしながらお二方の異常な態度は、奥方の氣質に由来しているのかもしれないせぬ。そこで、皇帝フェデリコとドン・アルバール・ファーニェス及びその二人の妻に起きました事をお聴きいただきとうございます」

伯爵はそれがどのような話であるのか聴かせてくれるようにとお頼みになられた。

「ルカノール伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「この度は二つの話を申し上げることに致します。一度に両話は申し上げられませぬので、先ずは皇帝フェデリコの話を、次にドン・アルバール・ファーニェスの話を申し上げることに致します。

伯爵様、皇帝フェデリコは御身分に相応する非常に高貴な名家の姫君をお妃に迎えられました。ところがこの婚姻は失敗だったのでございます。皇帝は不運にも婚前迄お妃の氣質をご存じではなかったからでございます。結婚前のお妃はなかなか貞淑な方でございますが、お妃になられましたからはそれはもう考えられぬほど向う意気が強く、手に負えぬ天邪鬼振りを発揮され始めました。それはこういう風でございました。皇帝

が食事を望まれますとお妃は断食を、就寝のご希望には起床を、好意を抱かれる人には反感をといった有様でございます。これ以上は言うには及びますまい。皇帝がお楽しみになられるものは全てお妃は厭われました。皇帝がおやりになることには常に反対のことをお妃はされたのでございます。

皇帝はしばらくの間このようなお妃にも耐えておられました。自分や周囲の者がいくら忠告しても妃の気質がなおらないことや、たとえ懇願やおどしやおもねりの手を用いてもだめであり、こらしめたからとて効き目のあるわけでもないことを悟られました。その上何ひとつ打開策も見出せない腹立たしいこのような夫婦生活から生じる害毒は、自分は元より民にとってもよくないとお考えになられました。そこで皇帝に、これ迄の経緯と、お妃の悪しき性格が自分や民にもたらすひどい害悪を訴えられ、『出来ませれば夫婦の誓を無効にさせていただきますよ』と切願されたのでございました。しかしながら皇帝は、キリスト教の法では離婚は許されぬことであり、さりとてそのような気質のお妃とは一緒に暮らせぬことを皇帝もご承知であることがわかりました。

他に妙案が見つからぬことから、皇帝は皇帝に『罪を犯しておらぬのに罰を与えることは出来ぬので、後はそちの英知に任せるより仕方があるまい』と仰せになられたのでございます。

皇帝は教皇の下を辞してご帰城なさいますと、懐柔や威嚇、諫言や説諭、お付きの者達と考え及ぶ限りの全ゆる手だてを用いてお妃の矯正に努められました。総ては徒労に終るばかりで、お妃は人の言葉に耳を傾けられるどころか増々意固地になられるばかりでございました。

どうあってもお妃を正すことの出来ぬことがお判りになった皇帝はある日『鹿狩に行こうとおもう。矢尻にその液汁を塗れば獲物を仕留め易い草を少し持って行くが、予の留守の間に、ひぜんやかさぶた、出血した個所には決つしてこの草を貼り付けてはならぬ。これには生物の生命をたちどころに奪つてしまふほどの毒があるのだから』とお妃に申されたのでございます。代りに安全で効き目のある塗薬を取り出されますと、皇帝は自らの患部にそれを塗布されました。お妃を初めその場に居る総ての者はこの塗薬の利目をはつきりと目にされたのでございます。皇帝は『必要とあらばこれを患部に塗布すればよい』と皆の目の前でお妃に申されました。それから鹿を仕留めるに必要なだけの草を手にとると、さっさと狩にお出かけになりました。さて皇帝がお出かけになりますと、すぐにお妃はこのような悪態を吐き出されました。『皇帝の嘔吐といったら、あのようなことを私におっしゃるなんて、私のひぜんがあの方のとは性質の違うことはとっくにおわかりで、草の方が私にはよく

利くこともご承知なのに「絶対使ってはいけない」と言つて効き目のない塗薬を私に勧めるなんて！ がっかりさせてあげるためにこの草の方を塗りましょう。ご帰城になると私のひぜんが治っているのがおわかりになるでしょうよ。皇帝を悔しがらせるにはいちばん効果のあるやり方だから好い気味だわ！」

お妃付きの騎士や女官達は思い止まらせるべく必死になつて、「塗ればたちまち絶命することは必定でございますから」と涙ながらに懇願致しました。それでもなおお妃は思い止まらうとはなさいませんでした。それどころか例の草を手にすると思部にその液汁を塗布されたのでございます。するとたちまち死の苦悶に襲われましたから、止せばよかったと悔みましたが、もはや後悔は何の役にも立たなかつたのでございます。一方ドン・アルバル・ファーニェスには全く逆の事が起りました。そこで事の顛末をおわかりいただきますために早速お話し申し上げることに致します。

ドン・アルバル・ファーニェスは温厚誠実なお人柄の方でございました。イスカールの邑を興され、そこにお住まいでございました。ところで、クエリヤールの邑を興し、そこにお住まいのドン・ペドロ・アンスーレス伯爵には、三人の姫君がおりてございました。ある日突然、ドン・アルバル・ファーニェスが伯の館へお出になりました。ドン・ペドロ・アンスー

レス伯はこの来訪を歓迎され、彼を食事に招待されました。食事を終えると早速、この思いがけなくて嬉しい来訪の理由をお訊ねになりますと、「姫君のお一人を妻に迎へたくやうて参りました。先ずは三人にお目に掛かり、お話をした上で私の意に最も叶う姫を妻に迎へたいとおもっております」と応えられたのでございます。伯はこの申し出は神のお思召であると考え「ドン・アルバル・ファーニェスの申し出を喜んでお受けする」と返答されました。

ドン・アルバル・ファーニェスは一番上の姫君とお二人だけになられると「もしご承諾いただけるのであれば妻にお迎えしたい」と打ち明けました。「その前にご承知ただかねばならぬことを申し上げておきます。先ず第一に、私はもう若くはなく、これ迄の戦で受けた数々の負傷のために頭も悪くなつておりますので、少しの酒でも理性を失くしてしまうほどです。その上腹を立てるとあらぬことを口走ったり、激怒の余りに人を傷つけることもしばしばでして、われに返ると後悔ばかりしております。第二は、就寝中に小児のようにベッドで大小の便を漏らしてしまうことです」と、その外にも、思慮分別に欠ける女性なら決つて結婚相手に彼を選ぶことなど考えられないようなことを語つたのでございます。

彼が説明し終えると伯爵の一番上の姫君は「この結婚は私よ

「りも両親の考え次第でございます」と返答すると、ドン・アルバル・ファーニエスのもとを去って父親の所へ行きました。両親は娘の決心を訊ねました。彼女はあまり利口ではありませんでしたから「ドン・アルバル・ファーニエスと結婚するぐらいなら死んだ方がましだわ」と申したのでございます。伯爵は娘の本心をドン・アルバル・ファーニエスに知らせたくはなかったものですから「娘はまだ結婚する気にはなっておりません」と応えました。

そこでドン・アルバル・ファーニエスは中の二番目の姫君と面談しました。すると彼女の場合も姉と同じでございました。さらに、下の三番目の姫君にも二人の姉に言った通りのことを打ち明けました。ところが彼女は「ドン・アルバル・ファーニエス様が私を妻にお望みになられるとは、私神様に感謝致しますわ」と応えました。さらに「お酒が貴方様をだめにするとおっしゃいましたが、貴方様のことで、他人の目に触れないのがよろしいことでしたら、どのようなことでも私は誰よりも上手に隠しおおせてみせますわ。貴方様はお年を召していらっしゃるとのことですが、このようなことで貴方様との結婚を諦めたりは致しません。ドン・アルバル・ファーニエス様の妻となれます名譽や幸運を放棄するつもりございませんもの。激怒なさるとご家来衆に乱暴なお振舞をなさるとのこと

ですが、ご案じなさいませぬように。貴方様がそのようなことをなさるような原因を決って作ったりは致しませんから。よしんばそうなりましても十分耐え忍べますので」と返答したのでございます。ドン・アルバル・ファーニエスは、彼の言った全てのことに、彼女が申し分のない受答をしたものですから大満悦で、かくも総明な女性と出会えたことに神に感謝されたほどでございます。そこでドン・ペドロ・アンスーレス伯爵に「末の姫君を妻にいただきたい」と申されますと、伯爵はとてもお喜びになりました。そこで早速婚禮の儀式が行なわれたのでございます。挙式後直ちにドン・アルバル・ファーニエスは新妻を伴って帰館致しました。ところでこのご婦人は名をドニャ・バスクニャーナと申されました。

新居にあっても彼女は総明な良妻振りを發揮されましたから、ドン・アルバル・ファーニエスは良き伴侶に恵まれたことを誇られ、「何事も妻の言う通りに行なわれるように」とお命じになられたのでございます。それは次のような二つの理由からでございます。第一の理由は、彼女は神の御意から生まれたような善女であり、夫をこよなく愛し、思慮分別は申し分なく、夫の言行は常に正鵠を射たものであると確信しておりとても立派であると考えておりますから、夫に逆らったことは一度もございませんでした。殿には、これは夫におもねる気持のな

せるわざである、などとお考えにならないでいただきたいのでございます。彼女は心底から夫ドン・アルバール・ファーニエスの言行の正しさと、夫の考えに優るものはないと確信していたからでございます。さて、ドン・アルバール・ファーニエスが妻の言葉通りに行なうようにと指図した第二の理由は、彼女が常に物事の是非を的確に見抜く判断力と公正さを身に付けた女性であるからでございます。それ故ドン・アルバール・ファーニエスは、妻をいつくしみ、大事にし、ことあるごとに助言を求められました。それにより、これ迄以上に令名と富が高まることになったのでございます。しかしながら、彼女が夫のドン・アルバール・ファーニエスに助言したことは、いと気高き勇気ある騎士に最もふさわしいことのみに限られておりました。

ある時ドン・アルバール・ファーニエスが館にお出になられますと、王宮で起居する彼の甥が来訪するというのがございました。ドン・アルバール・ファーニエスは甥の訪問を心から歓迎致しました。叔父の館での滞在が数日経ちました時、甥が「叔父上の寛大でたしなみの深さには感心致しますが、ひとつだけ気にくわぬことがございます」と告げたのでございます。すると「それは何だ」とドン・アルバール・ファーニエスはお訊ねになりました。甥は「奥方の言いなりでありすぎるのと、館や身代の管理までも任せておられることです」と応えまし

た。ドン・アルバール・ファーニエスは「近日中にその非難に応えることにする」と返答なさいました。

話を終えるとドン・アルバール・ファーニエスは、妻ドニャ・バスクニャーナに会わず、馬に乗ると甥を連れて別の邑へ出かけました。そこで数日過ごしたその最後の日に、ドニャ・バスクニャーナを呼びに使いを遣ったのでございます。ドン・アルバール・ファーニエスは途中で妻と落ち合うために甥と共に迎えに出かけました。ところが出会ってからも夫婦が二人だけで言葉を交す機会はありませんでした。ドン・アルバール・ファーニエスは甥と連れ立って先んじましたから、ドニャ・バスクニャーナは二人の後を追うことになりました。叔父と甥がこんな風にしてしばらく歩んでおりますと、雌牛の群が目止まりました。するとドン・アルバール・ファーニエスが次のように言い出したのです。「甥御よ、見たかね。ここには何と美しい雌馬がいることか」と。

この言葉を聴いて甥は仰天致しましたが、叔父の戯言だともい、雌牛を雌馬と言った理由を訊ねました。するとドン・アルバール・ファーニエスの方がびくりして「お前は気でも狂ったのか、どう見てもあれは雌馬だというのに」と甥に言い返しました。叔父が頑なにそう信じて大まじめで言っているのを知った甥は魂消ると、叔父は完全に正気ではないと考えまし

た。ドン・アルバール・ファーニエスがわざとしくこく言いつのっているところへドニャ・バスクニャーナが近附いてきました。妻を目にしたドン・アルバール・ファーニエスは甥に「甥御よ、妻のドニャ・バスクニャーナがやって参ったので口論はこれまでとしよう」と持ち掛けました。

甥にもちよほどよい頃合だとおもえました。その時ドニャ・バスクニャーナが追い着きましたので甥は、「叔母上、私達は言い合っていたところです。叔父上が雌牛を雌馬と言い張られるものですから、私はそうではなくて雌牛である、とやり返していたところです。私達は自分の考えを主張し合っておりまして、互いに相手を、正気ではない、頭がおかしくなっている、とおもっております。叔母上、本当のことをおっしゃって下さい」と彼女に訴えました。

ドニャ・バスクニャーナは、甥から夫のドン・アルバール・ファーニエスの主張を聞くと、彼女も雌牛だとおもいましたが、夫が雌牛と雌馬を取り違えることなどありえないのだから、きっと自分達の方が間違っているのだと考えました。そこで彼女は甥を初め供の者達にこう言ったのでございます。

「憶々、甥御様、貴方様のお言葉にはがっかりですわ。あれほど長くお住まいの王宮からお出になられたなんて嘘みたいですわ。雌馬と雌牛の違いもお判りにならないほど分別も見る

目もお持ちになっておられないとは！」

そこで彼女は、色や形、その他様々な面からそれが雌馬以外の何物でもないことを証明すると、ドン・アルバール・ファーニエスのすばらしい判断力に狂いはないので夫の主張は正しいと声明しました。彼女がきっぱりと断言したものですから、甥や供の者達は自分達の目を疑い始めました。そして自分達には雌牛とおもえるものは実は雌馬であって、ドン・アルバール・ファーニエスの言っていることの方が正しいのだと考え始めました。この後、再びドン・アルバール・ファーニエスと甥の二人が先んじておりましたところ、雌馬の大群に出会いました。するとドン・アルバール・ファーニエスが「甥御よ、これが雌牛なのだ。さきほどお前が雌牛と申したのは、わしの言った通り雌馬だったのだ」と言ったのでございます。

そこで甥は「御生ですから叔父上、叔父上の申されることが真実であれば、私をここへ連れて来たのは悪魔ではないのかと恐ろしくなります。これらが紛うことなく雌牛でありますなら、私は正常ではないことになりました。明らかにこれらは雌馬であって雌牛ではございません」と訴えました。

ドン・アルバール・ファーニエスは雌牛であると語気荒く言い出したのでございます。言い争っているところへ再びドニャ・バスクニャーナがやって参りました。彼女が来ると早速二人

は話の争点を伝えました。彼女は甥の主張が正しいとおもいましたが、ドン・アルバール・ファーニエスが間違いや嘘言をするなどとは考えられませんでしたから、夫の意見の正しさを援護すべくあれこれと理由を述べ立てました。すると甥を初め供の者達は、間違っているのは自分達で、ドン・アルバール・ファーニエスの言っていることが正しいのだ、と考えるようになったのでございます。

またまた叔父と甥が皆よりも先に立って行っておりまして、岸に多くの水車が立ち並ぶ川に出たのでございます。川の水を馬に飲ませる間に、ドン・アルバール・ファーニエスが「この川は上の方へ流れているから、水は下の方から水車へ流れて来ている」と言い出されました。彼の甥はこれを聞くと、自分の頭がおかしくなったとおもいました。すでに雌牛と雌馬を取り違えるという誤りをしておりましたから、川の水がドン・アルバール・ファーニエスの主張とは逆の方向から流れていると考えるのは間違っている、とおもったからでございます。しかし両者はこの点に関して再び言い争いました。そこへドニャ・バスクニャーナが追いまわりました。彼女は双方の言い分を聞く、甥の言っていることの方が正しいとおもったのですが、自分の考えを信頼するよりも、夫ドン・アルバール・ファーニエスを信じることにしました。そこで夫の考えの正しさを全ゆる

手だてを講じて弁護致しましたので、甥や供の者達は、彼女の説明により、ドン・アルバール・ファーニエスの方が正しいとおもったのでございます。

その時以来、川は上へ流れていると夫が言えば、良妻は夫を信じてその通りだと言うのが当然だ、ということわざが残りました。

ドン・アルバール・ファーニエスの甥は、ドニャ・バスクニャーナが叔父の主張の正当性を述べては、自分の方が取り違いの誤謬をしていることをあるごとくに証したことを考えると、気が滅入り、頭がおかしくなってしまうのではと恐れたのでございます。このようにさらに先へと歩み続けておりまして、悲嘆にくれた甥の表情を目にしたドン・アルバール・ファーニエスはこんな風に語り掛けました。

「甥御よ、先日お前は、わしが妻を過度に信頼しておる、と家臣達の非難を申しておったが、これがそれに対するわしの返答だ。今日これ迄の出来事は、妻の真の姿を理解し、妻の助言や考えを頼みにことを行なうのもそれなりの理由のあることを判らせようと、わしが打った芝居なのだ。われわれが最初に見た動物は、お前の言った通り雌牛であることなど承知の上でわしは雌馬だと申したのだ。お前からわしがあればを雌馬だと主張しているのを聞いた妻は、お前の方が正しいとおもったこと

は間違いない。しかし妻はわしがどのような場合でも間違いないと確信しておるので、お前と同じように彼女は自分も雌牛と雌馬を取り違えたと判断したのだ。そこで、あれこれと理由を述べ立ててはわしを弁護し、お前や供の者達にわしの方が正しいと思ひ込ませたのだ。同じ事がその後の雌馬や川の場合にも起ったというわけだ。お前に念をおしておくが、結婚以來、妻はわしの氣に入っていることだけを自分の楽しみとし、わしの氣分を害することは何ひとつ口にせず、わしの行為に一度たりとも嫌な顔をしたことはない。妻はわしの行いは常に最良であると確信しているからだ。彼女は妻としての義務を申し分なく遂行しており、その上わしから任されたこともやすやすと行なっておる。さらにわしを敬愛し、わしが主で、何事もわしの意のままに行なわれていることを世間にわからせようと努めておる。わしの為になり、また行なえばわしが喜ぶのを知るだけで無上の誉と考えておる。おもうに、仮にわしのためにアフリカのモーロ人が同じことをやったとしても、わしは彼を愛し、彼に心から敬意を表したにちがいない。ましてや一緒になつた妻であればなおさらのことだ。わしの妻はこのようによい氣立の持主で、素姓も申し分なく、わしは良き伴侶に恵まれたとおもっておる。甥御よ、わしは今、過日お前が申した非難に  
 応えた』

叔父の説明に甥はとても感激致しました。そして彼は、ドニャ・バスクニャーナがこの上もなく総明で思いやり深い女性なので、ドン・アルバール・ファーニェスが妻を信愛し、妻のために行なうことは正しいことであり、彼がこれまでに行なってきたことや、可能ならもっと行なっても正当なのだと思つたのでございます。皇帝の妻とドン・アルバール・ファーニェスの妻とは、このように大きな相異がございました。

ところで、ルカノール伯爵様、殿の御兄弟には、お一方は奥方の望まれることは何んでもおやりになり、もうお一方はその反対のことをおやりになるといった大変な違いがあるのでございます。おそろくは御兄弟の奥方様方に、お妃とドニャ・バスクニャーナのような相異のあることが原因なのでございます。もしその通りでございますなら、びっくりなさることも、御兄弟をおとがめになる必要もございません。しかし、御兄弟の奥方様が、申し上げました二人の女性ほどは良妻でもまた悪妻でもございません場合には、その責任は御兄弟方に存することになりましょう。すなわち、奥方をこよなく愛されているお方は、妻を愛するということに関しては結構なのですが、度を越してはいけないうことをご承知置き下さい。妻を寵愛する人は片時も妻の側を離れようとはせず、そのために領地の見廻りや名を挙げ利を得ることに出かけなくなり、大変な過を

仕出かすからでございます。妻を喜ばせ、妻の望みを叶えるべく、地位や名譽に関することを何もせぬのは道理に背く行為であるからでございます。しかしながら夫は愛情や信頼を身をもって妻に示すことも必要なのでございます。また妻は、取るに足らぬことで夫を立腹させたり、不快な気分させぬように努めねばなりません。とりわけ夫には、腹立ちから過を犯させぬように努めねばなりません。このような事態から余多の不幸が生じるからでございます。つまり悪事や罪を犯したり、また、夫の過に立腹した妻をなだめて機嫌を取るために、地位や名譽を害なうことを行なうようになるであります。しかしながら、不運にもお妃のような女性を妻に迎へ、初めにその氣質を正すことの出来なかつた人は、一生その不運を耐え忍ぶしか策はございません。いづれに致しましても、夫たる者は結婚したその日に、己が家長であることを妻に悟らせ、且つ夫婦としての在り方を教えることが肝要であることを、殿にはご銘記なさって下さい。ところで伯爵様、このようなことをご勘案いただきませすれば、御兄弟の方々に奥方との身の処し方を助言なさることがお出来になるものと考えます」

伯爵はパトロニーオの言葉をいたく気に入られ、すべてが真実であり、まことに要領を得ているとお考えになられた。

ドン・ファンはこの二つの教訓談を有益であると考えたの

で、これを本書に記させた。そして次のような詩を作った。

婚礼の日、夫は妻に、

夫婦関係の在り方を説かねばならない。

〔訳者註〕ここでは末尾の文が欠落〕

## 第二十八話 「ドン・ロレンソ・スアーレス・

ガリイナートがグラナダで回教に改宗した聖職者を切り殺した事について」

ある時、ルカノール伯爵は助言者パトロニーオと話をしておられたが、それはこのような話であった。

「パトロニーオ、さるお方が予の下へ庇護を求めにやって参った。好人物たることは承知なのだが、噂では無法な行為を行なったとのことだ。そこでお前の叡智を頼み、予の身の振り方を助言してほしい」

「伯爵様」とパトロニーオは返答した。「おもいまするに、殿にふさわしい身の処し方をなさいますには、ドン・ロレンソ・スアーレス・ガリイナートに持ち上がりましたことをお聴きいただきますれば幸いです」

伯爵はそれはどういふことかとお訊ねになられた。

「伯爵様」とパトロニーオは語り出した。「ドン・ロレンソ・スアーレスは、カステイリヤ王に国籍を剝脱されてからというものは、グラナダ国王の下で起居しておられました。ところがカステイリヤ王ドン・フェルナンドの恩赦により帰国されたのでございます。ある日、カステイリヤ国王はドン・スアーレス・ガリイナートに「お前はキリスト教徒の敵たる回教徒に味方するという、神の意に背く行為をなしてきたが、やはり末期には神の慈悲を賜り、魂が救済されんことを願うのか」とお訊ねになられたのでございます。すると彼は「私は一人の聖職者を殺したことで以外にはいまだかつて神の意に背く行為をしたことはございません」と応えました。国王は彼のつじつまの合わぬ返答に説明をお求めになられました。そこで彼は次のように語ったのでございます。「私はグラナダ王の下で過ごしておりましたが、王は殊の外私を信頼され、近衛隊の長に据えられたのでございます。ある日、馬で王のお供をしながら市中を巡行しておりますと、数人の男が大声で騒ぎ立てる声が耳に入

りました。近衛隊の長であります私は、馬に拍車を当てる騒ぎの現場へ駆けつけました。そこで目にしたのは僧服を着た一人の聖職者でございました。この聖職者はキリスト教徒でありながら回教徒になった者であることをご承知置き下さい。この者がある日、回教徒達を喜ばせようと「皆の衆、お望みなら、キリスト教徒が真の神と考え、信じている神を其方達に引き渡そう」と言ったのでございます。回教徒達は是非にと懇願しました。そこでキリスト教を背教した男は祭壇と法衣を作らせる、ミサを取り行ない、聖体を奉獻しました。その後で奉獻した聖体を回教徒に引き渡したのでございます。彼らは聖体を市中に引き摺り回しては数え切れぬほどの侮辱を働きました。

ドン・ロレンソ・スアーレスはこのような状況をまのあたりに致しました時、回教徒の中で暮らしてはいるものの自分はキリスト教徒であることに気が付きました。あれはまさしくイエス・キリストの聖体であり、罪人を救うために己が身を犠牲にされたお方であることを思い出したのでございます。そして神になされた侮辱への報復を行ないつつ落命した者は、至福者と見做されることに思い至りました。そこで怒り心頭に発した彼は回教に転宗した裏切り者に襲いかかり、その首を切り落したのでございます。下馬すると膝まづき、回教徒達が引き摺り回していた聖体を礼拝致しました。ドン・ロレンソが膝まづくや

否や、やや離れた所にあった聖体は地面から飛び上がり、彼の膝の上に落ちたのでございます。さて、事態を目撃したモーロ人達は激怒しました。手に手に太刀や棒や、石を握りドン・ロレンソ目がけて襲って来たのでございます。彼は背教者の首を切り落した剣を抜き防戦致しました。王がこの騒ぎを耳にされ、そしてドン・ロレンソ・スアーレスの生命がまさに風前の灯であるのを御覧になると、『手出しをしてはならぬ』と仰せにられました。王が事の顛末をお訊ねになりますと、怒り心頭に発し、『猛り立っていたモーロ人達はその経緯を語りました。王も大層お腹立ちになり、激昂してドン・ロレンソ・スアーレスに殺害の理由を訊ねられました。すると彼は『私がキリスト教徒であることは王も先刻ご承知のことでございます。にもかかわらず私を忠実なる者と信頼され、私に近衛隊の長を託されました。また私が死を恐れて義務を果さぬ者ではないこともご承知のことでございます。回教徒であられる王に寄せる私の忠誠心を信頼されますなら、主、イエス・キリストの聖体を守ることはキリスト教徒たる者の義務であることに驚かれてはなりません。これにより王が私の処刑をお命じになられるなら、私は自らを幸福者と見做すでありましょう』と返答したのでございます。王はこの言葉を耳にすると、ドン・ロレンソ・スアーレスが彼の神への忠誠からなした行為を喜ばれ、彼を尊敬

し、以後益々愛でられたのでございます。

伯爵様、殿の庇護をお求めのお方が立派な人であると承知し、信頼なさっておられますならば、理由もなく無法な行為をしたとの噂だけでそのお方をこぼまれるべきではございません。何故なら、そのような噂は、カステイリヤ王がドン・ロレンソ・スアーレスの聖職者殺しを、初めは無法な行為だとお考えになられたのと同じだからでございます。ところがドン・ロレンソはこの世で最も称賛に値する行為をなしたのでございます。しかし、もし殿はそのお方が無法な行いをしたと確信しておられますならば、お側からしりぞけられるのがよろしいでありますように」

伯爵はパトロニオが語った話を非常に気に入られ、彼の助言通りに実行されたところ結果は上々であった。

ドン・ファンはこの教訓談が有益であると判断したので、本書に記すよう命じた。そして次のような詩を作った。

無法な行為に見えるものも、  
よくよく見れば道理に適っている。

この物語はこれで終るが話はさらに続く……